

マルコによる福音書 8章31節～9章1節

2016年10月27日

古本 靖久

1、聖歌 546番 「十字架を背負えと」

2、お祈り

3、聖書輪読 （新約聖書 77 ページ）

4、テキストの位置

まず先月の場面を思い出してみましょう。イエス様は弟子たちに「あなたがた自身はわたしを何者だと言うのか」と聞きました。するとペトロはその間に答えて、「あなたこそキリストです」と言いました。

受難への道	8:27-30	イエスとは何者か
	8:31-33	第一回受難予告
	8:34-9:1	弟子であることとは
	9:2-13	イエスの姿が変わる

その言葉を聞いて、イエス様はペトロを叱りつけます。それはペトロをはじめとする弟子たちがイエス様のことを正しく理解していないにもかかわらず、ご自分のことを「キリストだ」と軽々しく告白していたからではないかという内容でした。

そのような弟子たちに今回、イエス様はご自分が殺され、そして復活することを告げます。イエス様は受難の道へ確実に進んでいることを、弟子たちに伝えるのです。しかしイエス様の言葉は、ペトロをはじめとする弟子たちには理解できなかったようです。

イエス様の受難予告は今日の箇所を含め、マルコ福音書には三度出てきます。イエス様はご自分が何のために来られたのか、本当のキリストとはどういった方なのかを何度も語り、十字架に備えていきます。そしてさらに、ご自分に従うことの意味を教えられます。



「自分の十字架を背負え」という言葉は、今を生きるわたしたちにも重くのしかかります。ではその言葉の意味することは何なのでしょう。詳しく見ていきましょう。

5、節ごとに

◆第一回受難予告

8:31 それからイエス（彼）は、人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちから排斥（廃棄）されて殺され、三日の後に復活することになっている、と弟子たち（彼ら）に教え始められた。

イエス様は、「人の子は」と話し始めます。「わたし」ではなく、まるで第三者のような語り方です。この「人の子」という表現は福音書に多く見られ、すべてイエス様のことを指しています。イエス様はご自分のことを、権威を持ち、苦しみを受け、死に、復活し、栄光のうちに再び来られ、支配する「人の子」として語られます。

この「人の子」という表現は、旧約聖書の中でやがて来る救い主の称号として用いられていました。そして福音書では、イエス様と救い主とを結びつける言葉として使われます。

イエス様が語った予告、それはご自分が無用なものとして捨てられるという内容でした。排斥されるという言葉は、「遠ざける」、「受け入れない」という意味ですが、ここで使われている単語は、「廃棄される」という強い言葉です。そしてイエス様を廃棄するのは、当時のエルサレム議会を構成していた「長老、祭司長、律法学者たち」だとイエス様は言われま
す。つまりエルサレム当局が、イエス様を不要なものとして捨てるということです。

そしてその三日後の復活も予告されます。「することになっている」と訳されている言葉ですが、この語が使われるときは、神さまの計画によってそのことがなされるという意味を持ちます。つまりイエス様の受難と復活は神さまの意志であり、神さまによって決められたことなのだと、イエス様はここでははっきりと伝えられたのです。

8:32 七かも（そして）、そのことをはっきりと（あからさまに）お話しになった。すると、ペトロは（が）イエス（彼）をわきへお連れして（連れ出し）、いさめ（叱りつけ）始めた。

イエス様はその神さまのご計画を、隠すことなくあからさまに語られます。これまでイエス様は、たとえを用いて語る事が多くありました。しかしここでは、誰にでもわかるような形で、公然と言われました。

その様子を見たペトロが行動を起こします。イエス様をわきへ連れ出し、叱りつけ始めるのです。30節でイエス様は弟子たちを「戒め」ました。そのときもここでは「叱りつけ」と訳しましたが、この「いさめ」も同じ単語が使われています。

前回は触れましたが、この「叱りつける」という語は大変厳しい言葉です。悪霊を追い出すときにも使われるような言葉を、ペトロはイエス様に対して使いました。つまりペトロはこっそりイエス様を連れ出して、優しく諭したのではありません。無理やり引きずり出して、厳しく問い詰めたのです。



この言葉は、先ほども書いたように悪霊を追い払うときに用いることがあります。もしかするとペトロは、イエス様は悪霊の仕業でそのようなことを語ったと考え、悪霊払いに用いるような言葉をイエス様に対して用いたのかもしれませんが。

8:33 (そして) イエス (彼) は振り返って、(自分の) 弟子たちを見ながら、ペトロを叱りつけ (りつけ) て言われた。「サタン、(わたしの後ろに) 引き下がれ。あなたは神のことを思わず、人間のことを思っている。」

今度はイエス様が叱りつける番です。「サタン、わたしの後ろに下がれ」と厳しくペトロを叱責します。30節ではイエス様は弟子たちを、32節ではペトロがイエス様を、そしてここではイエス様がペトロを叱りつけます。イエス様とペトロを含む弟子たちとの間の、方向性の違いが強調されています。

さてイエス様はペトロに、ご自分の後ろに下がるように命じます。わたしの前が出るなどと言われるのです。ペトロはイエス様の受難と復活の予告が神さまのご計画であることを聞きながら、それを避けようとしてしました。ペトロがイエス様を、自分の思う方向に導こうとしたのです。しかしイエス様は言われます。そこはあなたがおるべき場所ではないと。弟子たちの場所とはイエス様の後ろであり、そこで歩むことがイエス様に従うことなのです。

<ここまでの箇所から>

ペトロは「あなたは神のことを思わず、人間のことを思っている」と叱責されます。自分の立場からのみ、物事を見ているのです。

わたしたちには、神さまのご計画はなかなか理解できません。目の前の出来事に心が騒ぎ、どう生きて行けばよいのかわからなくなることもしばしばです。そのようなときに、神さまのことを忘れてしまうこともあるかもしれません。しかしそのときこそ、神さまにすべてを委ねていくようにと、イエス様は言われているのです。神さまは、必ずわたしたちをよい方に導いて下さると信じて、神さまを見つめて歩んでいきたいと思えます。

◆弟子であることとは

8:34 それから（そして）、群衆を（自分の）弟子たちと共に呼び寄せて（彼らに）言われた。「（もしだれでも）わたしの後に従いたい者は（と思うならば）、自分を捨て（否定し）、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。

イエス様は再び群衆を呼びます。そしてペトロによって中断させられた「受難と復活の予告」の続きを語られます。

イエス様はご自分に従う弟子の条件を突き付けます。イエス様の弟子とは自分を否定し、自分の十字架を負い、イエス様に従う者です。「だれでも」と語られているので、民族、時代、職業、性別など何も関係なく招かれています。つまり今ここにいるわたしたちに対しても、イエス様は語られているのです。

新共同訳聖書で「自分を捨て」と訳されている言葉は、直訳では「否定する」となります。これは自分自身を拒絶することではありません。自分を憎むことではないのです。そうではなく自分勝手な思いや、自分を正当化する心などを手放すことです。簡単にいうと、自分を否定するとは神さまにすべてを委ね切るということです。

そして自分の十字架を背負うということは、イエス様と共に処刑場へと向かうことを意味します。ローマでは十字架刑は一般化しており、判決を受けた罪人が自分の十字架を担いで処刑場に向かう姿は、よく見かけられていました。イエス様に従うとは、イエス様の十字架の道を思い起こし、自らもイエス様の歩みに倣うことでもあるのです。

8:35 （すなわち）自分の命を救いたいと思ふ（欲する）者は、それを失うが、（自分の命を）わたしのため、また（と）福音のために命を失う者は、それを救うのである（だろう）。

自分の命を救いたいと欲する者とは、自分の力だけで生きていこうと思う人のことです。それに対して自分の命をイエス様と福音のために失う者とは、自分の命を手放し、神さま、どうぞ用いてくださいと委ねる人のことです。

自分の命を神さまに委ねた人ときに、その人には永遠の命が与えられます。



8:36 (すなわち)人は、たとえ全世界を手に入れても、自分の命を失ったら、(それがその人にとって)何の得があるか。

自分の命を失うという言葉は、「罰金を課する」という意味にも用いられます。つまり自分に固執するあまり、神さまから罰金として命を奪われるという意味です。「愚かな金持ちのたとえ」(ルカ 12 章 13～21 節)の中で神さまが金持ちに、「愚かな者よ、今夜、お前の命は取り上げられる」と言われた場面を思い起こします。

8:37 (すなわちまた)自分の命を買い戻すのに(の代償として)、(人は)どんな代価を支払えようか(何を与えることができるか)。

その取り上げられた命は、買い戻すことなどできません。

8:38 神に背いたこの(姦淫で)罪深い時代に、わたしとわたしの言葉を恥じる(から離れる)者は、人の子もまた、父の栄光に輝いて(のうちに)聖なる天使たちと共に来るときに、その者を恥じる(から離れる)。」

「わたしの言葉」と 35 節の「福音」とは、ほぼ同じ意味で使われています。また「神に背いた」と訳されていた語は、「姦淫」という語の形容詞です。「姦淫をしてはならない」とは十戒の中にある非常に大きな戒めです。

姦淫とは他の神々を拝むことも指していました。イエス様が来ているのにその言葉を信じず、理解しようとしない。そのような時代とは、2000 年前だけではないと思います。

9:1 (そして)また、イエス(彼)は(彼らに)言われた。「はっきり言うておく(アーメン、わたしはあなたたちに言う)。ここに一緒に(立って)いる人々の中には、神の国が力にあふれて現れるのを見るまでは、決して死(を味わ)わない者がいる。」

「アーメン、わたしはあなたたちに言う」という言い回しは、マルコ福音書ではこれが三回目です。イエス様の言葉につけられ、発言の内容に権威と真実性を与えます。

イエス様は宣教活動を開始されるときに「神の国は近づいた」と言われました。そして今、神の国が間もなくやってくるという約束を述べられます。では神の国とは、一体何なのでしょう。

神の国と表現すると、わたしたちは領土を持った国を思い浮かべます。しかしその言葉には、支配という意味も持ちます。神さまの支配する国とは、神さまのみ手に包まれた世界のことだといえます。聖書には、この神の国のことがこのように書かれています。

「神の国は、見える形では来ない。『ここにある』『あそこにある』と言えるものでもない。実に、神の国はあなたがたの間にあるのだ。」(ルカ 17 章 20～21 節)

わたしたちの間にやってくる神の国。それを見るまで死を味わわない者がいるとイエス様は言われます。つまり間もなく、そのときはやってくるのだと約束されているのです。

<今日の箇所から>

弟子たちは、イエス様の宣教といやしの業に参加してきました。そして今、受難に向かうイエス様にも従うようにと促されます。

この招きは、わたしたちにも向けられています。自分の十字架を背負いイエス様に従うことは、決して楽しいことではありません。自分が思い描いていた道を歩むことができずに、ペトロのように「イエス様、そんなこと言わないでください」と叫んでしまうこともあるでしょう。



しかしわたしたちは、自分を否定することを要求されます。それはただただ、神さまにすべてを委ねるということです。

海に浮かぼうと思ったら、全身の力を抜いて、波にすべてを委ねます。もし自分で浮かうと考えると力をいれて水を掻き出したら、あっという間にブクブクと沈んでしまうでしょう。

イエス様に従うために自分を否定する。それは自分の力に頼らずにすべてを神さまにお任せするということです。力を入れると、沈んでしまいます。神さまが必ず良い方向に導いてくださる。そのことを信じ、すべてをお任せしましょう。

今回の学びはこれで終わります。次回は 11 月 24 日(木)10 時 30 分からです。「イエスの姿が変わる」(マルコ 9 : 2～13) について学んでいきます。